

第二次世界大戦期ドイツにおけるパレスチナ
人指導者：ハーツジ・アミーン・アル・フ
サイニーとナチスの関係をめぐる最近の研究
動向

Usuki, Akira / 臼杵, 陽

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / 経済志林

(巻 / Volume)

79

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

113

(終了ページ / End Page)

140

(発行年 / Year)

2012-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007792>

第二次世界大戦期ドイツにおけるパレスチナ人指導者 — ハーッジ・アミン・アル・フサイニーとナチスの関係をめぐる最近の研究動向

白 杵 陽

I. はじめに

ハーッジ・ムハンマド・アミン・アル・フサイニー（1895～1974年, al-Hājj Muhammad Amīn al-Husaynī 以下、ハーッジ・アミンと略記）は、イギリスによるパレスチナ委任統治期から1948年のイスラエル建国を経て1974年にベイルートで没するまで、パレスチナ民族運動を率いた政治指導者としてパレスチナ現代史では著名な人物である。しかし、PLO（パレスチナ解放機構）議長であった故ヤーシル・アラファート（1929～2004年）よりも古い世代に属する、PLO登場以前の政治指導者として、最近までは忘れ去られてしまっていた存在といってもよかった。

ところが、2001年9月11日にニューヨークおよびワシントンで起こった、いわゆる「同時多発テロ事件」（9・11事件）以降、予期せぬかたちで突如として「復活」することになったのである。1980年代以降、イスラーム世界におけるイスラーム主義運動の高揚に伴い、さらに米ソ冷戦終焉後はハンティントン流の「文明の衝突」論もあいまって、欧米諸国では「イスラームの脅威」論が声高に語られるようになり、9・11事件後は「イスラーム・テロリズム」の危険性が喧伝されるようになっていたという歴史

的な背景もある。

9・11事件後、欧米社会においてムスリムに対して、言われなき嫌がらせ・差別的行為であるヘイト・クライムにかかる事件が続発することになったが、そのことはムスリムへの嫌悪を意味するイスラモフォビア（イスラーム嫌い）のような社会的現象を呈することになった。皮肉にも、その際に新たな問題として浮上してきたのがアラブあるいはムスリムの反ユダヤ主義の問題であった。欧米社会におけるムスリム排斥の問題は極右あるいはネオナチの台頭とも軌を一にするので、新たな反ユダヤ主義が必ずしもムスリムにのみかわる問題ではない。にもかかわらず、パレスチナ問題あるいはパレスチナ／イスラエル紛争の解決の出口が見えない現状を反映して、アラブあるいはムスリムによる反ユダヤ主義を伴う暴力が欧米社会で問題視されるのもやむをえない面もあるともいえる。だからこそ、以上を背景として、ハーッジ・アミーンが、欧米社会において席卷し始めた新たな反ユダヤ主義とイスラモフォビアの広がりという問題とに関連づけられて改めて注目されるようになった¹⁾。ハーッジ・アミーンがナチスと協力したという事実が歴史的文脈抜きで取り上げられ、彼が「イスラーム・テロリズム」の歴史的な意味でのプロトタイプとして否定的な評価を伴って語られ始めてしまうことになったのである。

ハーッジ・アミーン・アル・フサイニーに関する本格的な研究はわが国においてはほとんどなされていない現状である。ハーッジ・アミーンはパレスチナ委任統治期（1922～1948年）にはエルサレムのムフティー（大ムフティー）、あるいはイスラーム最高評議会議長として活躍したが、1937年にイギリス委任統治政府によってこの二つの公職を解任されて、亡命を余儀なくされた。亡命後、急速に枢軸側、とりわけナチスに接近して、1941年以降はベルリンに滞在し、ナチスとの関係を深めていった。そのハーッ

1) イスラモフォビアと反ユダヤ主義の結びつきに関する議論としては、臼杵陽『イスラームはなぜ敵とされたか』青土社、2009年、を参照されたい。

ジ・アミーンの行動の当否をどのような立場からどのように評価するのであれ、事実として、彼がユダヤ人絶滅政策の一翼を担ったとしてシオニストが彼を強く非難し、時には「悪魔化」していることだけはたしかなのである。本論においては、最近のハーッジ・アミーンに関する研究動向を整理して、「イスラーム・テロリズム」のプロトタイプとして彼を位置づけることの意味を考える。また、彼の存在自体がパレスチナ研究においてその評価をめぐる、ナチスとの関係という負の側面を代表し、21世紀に入っ
てなおいっそう激しい論争の的になっていることを踏まえ、このようなパレスチナ人の政治指導者の歴史的な役割を論じていく場合、新たな研究の方向性を含めて今後残された課題とは何なのかを考えてみたい。

Ⅱ. ハーッジ・アミーン研究の最近の動向—第二次大戦期を中心に

筆者はかつて委任統治期パレスチナにおけるハーッジ・アミーンの政治的役割を論じたことがある。その際、アルバート・ホーラーニーの「名望家政治」の議論の枠組みを援用することによって、ハーッジ・アミーンを政府と民衆の間の政治的仲介者として次のように位置づけた。ハーッジ・アミーンの政治的役割は「イギリスによるパレスチナ委任統治という形態のもとでの「名望家政治」(the politics of notables)といえよう。すなわち、エルサレムのムフティー（大ムフティー、al-Mufti al-Akbar:在職1921～48年）およびイスラーム最高評議会（al-majlis al-islāmī al-a'lā:在職1922～37年）議長というイスラームに関する宗教的公職、ならびにエルサレム市長職を頂点とするパレスチナ諸都市の市長職という公的地位の配分をめぐる名望家の争い」であるとして捉えたのである²⁾。この二つの公職はイギリスのパレスチナ委任統治政府によって任命されたのである。

2) 臼杵陽「パレスチナ・アラブの民族運動—1930年代のハーッジ・アミーンおよびその他の政治グループの政治的役割」伊能武次編『アラブ世界の政治力学』アジア経済研究所、1985年、3-36頁。

さて、この引用部分における「名望家政治」の名望家とは「政府と大衆の間の仲介者として、ある一定の政治的役割を担うことができ、ある制限内で都市民衆の指導者としての役割を担う」政治的なグループである。ホーラーニーはそのグループに、ウラマー（イスラーム法学者などのイスラーム的学者知識人）、地方守備隊（local garrison）、そして世俗の名望家（アラビア語でa'yān, aghā, amīrなどと呼ばれる）を含める。そして彼はエルサレムこそが「名望家政治」が最も純粋な形で行なわれた場所とするのである³⁾。また、委任統治期パレスチナにおける「名望家の争い」とは、ダムフティーおよび評議会議長職を拠点とする評議会派（al-majlisiyūn）のフサイニー派と、エルサレム市長職に拠点を置きつつ評議会と対立する反対派（al-mu'aridūn）のナシャーシービー派との間の派閥争いが1920年代の中心的な政治的紛争であった。

筆者は、「名望家政治」の概念を援用しつつ、オスマン帝国からイギリスによる委任統治へのパレスチナ支配の移行を、支配者の統治技術の観点から、連続したものとして把握する立場をとった。そのような議論に基づいてハーッジ・アミンが委任統治政府によってイスラームの公職を追放されることをもって「名望家政治」の〈場〉の破綻と考えたのである。すなわち、「ハーッジ・アミンの限界は、反乱の二つの局面で顕在化する。第1は、1936年4月のゼネスト宣言に至る過程において、第2は、ピール報告公表（1937年7月）からハーッジ・アミンの公職追放に至る過程において、彼の限界はあらわになる。第1の局面では、ハーッジ・アミンはイスティクラール派の圧力によりアラブ高等委員会委員長に就任し、彼の民族主義的立場は一つの極に達する。また、第2の局面では、彼はカッサーム派を中心とする武装蜂起を抑えることができず、ついには委任統治政府から見放されるという事態、すなわち公職からの追放という彼にとって

3) Hourani, Albert, "Ottoman Reform and the Politics of Notables", in Polk, William R. & Richard L. Chambers eds. *Beginnings of Modernization in the Middle East: The Nineteenth Century*, Chicago: The University of Chicago Press, 1968, p.48.

予期せぬ事態へと発展する。この事態は、ハーッジ・アミーンの政治指導を特徴づける政治的仲介者としての役割を果たす場を失ったことを意味する。機会主義者であるハーッジ・アミーンは、以後ダマスカスに拠点を移し、反英的姿勢をテコとしながら枢軸側へ傾斜してゆく⁴⁾。

本論における議論においてはむしろ1937年のパレスチナからの追放後のハーッジ・アミーンに関する新たな研究を整理することにある。というのも、彼はパレスチナ追放後に急激に反英的な立場をとることになり、同時に「敵の敵は味方」の論理でドイツやイタリアなどの枢軸側に接近していくことになったからである。1937年を境にして、政治家としてのハーッジ・アミーンは大きく変貌していく。その変わり方は著しく対照的といってもいいものなのである。したがって、委任統治領パレスチナにおける「名望家政治」を踏襲した政治指導者としてのハーッジ・アミーンと亡命後の枢軸側をも政治的に「利用」しようとする扇動的な政治指導者としてのハーッジ・アミーンは明確に区別して議論する必要がある。筆者がここで引用した拙論を執筆したのは四半世紀前のことであり、拙論では亡命後のハーッジ・アミーンについてはまったく触れることができなかった。その後、パレスチナ追放前のエルサレムのムフティーについての研究はそれなりに蓄積を重ねてきたことはいうまでもない。少なくとも委任統治期のハーッジ・アミーン自身の政治的・宗教的役割に関する研究に限ってはそれほど多いともいえないが、厳密な史料批判に基づく信頼できる評伝が刊行されている事実はここで指摘しておきたい⁵⁾。

4) 白杵前掲論文、30頁。

5) 筆者が引用論考を発表してから以降に刊行されたハーッジ・アミーンの評伝のうち英語文献では以下のものを挙げることができる。Tayshir Jbara, *Palestinian leader Hajj Amin al-Husayni: Mufti of Jerusalem*, Princeton NJ: The Kingston Press, 1985; Philip Mattar, *The Mufti of Jerusalem: Al-Hajj Amin al-Husayni and the Palestinian National Movement*, New York: Columbia University Press, 1988; Zvi Elpeleg, translated from Hebrew by David Harvey & Shmuel Himelstein, *The Grand Mufti: Haj Amin al-Hussaini, Founder of the Palestinian National Movement*, London: Frank Cass, 1993.ただし、Jbaraは1937年のハーッジ・アミーン亡命までを対象としている。

しかし、前述のとおり、ハーッジ・アミンがパレスチナから亡命した後のナチス・ドイツとの関係についての近年における研究の蓄積は枚挙に暇がないほどに、まさに異常ともいえる活況を呈しているのである。ハーッジ・アミンが「敵の敵は味方」の論理で1930年代後半のイギリスの最大の敵であったナチス・ドイツに接近して、ユダヤ人への憎悪という点でも利害が一致したために同盟関係に入ったという歴史的な事実自体が第二次世界大戦後、ナチス政権が崩壊して存在しなくなった後にも、ナチスの反ユダヤ主義的な考え方を踏襲するのがイスラエルを敵とするパレスチナ人ムスリム指導者であり、ひいてはアラブ諸国のムスリム指導者、あるいはイスラーム諸国のムスリム政治指導者へと恣意的に拡大解釈されていくことになったのである。実際、1950年代にナーセル大統領なども登場したときには欧米メディアの一部で「ナイルのヒトラー（Hitler on the Nile）」などのレトリックが駆使されたが、それはたんなるレトリックにとどまらず、そのような揶揄的な表現がユダヤ人問題およびパレスチナ問題の文脈で位置づけられた場合、それに歴史的な根拠がまったくないとは言えないのである。そのような関心のあり方を典型的に示す一文を引用しておこう。

「1930年代のエジプトおよびパレスチナにおいては、イデオロギー的かつ個人的接触が拡大して、とりわけムスリム同胞団がヒトラーの『わが闘争』のアラビア語版の出版を決定し、エルサレムの大ムフティー、アミン・アル・フサイニー、そしてユダヤ人移民に反対する1936～39年のパレスチナの「アラブ反乱」を支援するドイツの資金と武器とが流れ込むという事態になったのである。

（本書の著者である）クンツェルは、戦時期ベルリンにおけるフサイニーおよびその仲間たちのナチス・ドイツへの支援とアラブ世界へのナチス・ドイツからのアラビア語短波放送を通してなされた支援について議論している。フサイニーはナチス・ドイツ高官がヨーロッパのユダヤ人がパレスチナに脱出しようとするのを阻むようにうまく言いくるめたこ

とを本書は思い出させるのである。1945～1948年の間、イスラーム主義は『最も重要な後押し』を得た。というのも、その時、第二次世界大戦の戦勝国が『反ユダヤ主義、ヒトラー崇拜、ホロコースト否定、イスラエル破壊の際限のない欲望といったイデオロギー的策謀を抑え込むどころか、アラブ諸国との友好関係を重視した結果だったためであり、その最重要な構成部分がムフティーだったのである。』戦時期の反ファシズム・反ナチズムが冷戦時の優先事項に取って代わるにつれて、英米の承認の下、フランスはフサイニーがナチの戦犯として起訴されるのを逃れるのを許し、エジプトに亡命させてしまったのである」⁶⁾。

この一節は、ドイツ現代史研究者のジェフリー・ハーツ・メリーランド大学教授が、ドイツ人研究者マティアス・クントツェル・エルサレム・ヘブライ大学研究員（当時）のドイツ語の著書⁷⁾の英語版が翻訳・出版された際に「序文」として執筆したものである。長々と引用したのは、この著書『ジハードとユダヤ人憎悪』というタイトルに示されているように、英語圏における問題のありかが表れているからである。ドイツ語原版の副題がたんに「新たな反ユダヤ戦争について」でかなり穏当な表現であったのが、英語版の副題は「イスラーム主義、ナチズム、そして9・11の起源」という直接的な表現になって、イスラーム主義とナチズムとアル・カーイダの三者の同一の系譜的な関係をよりはっきりと明示し、かつまた挑発的になっていることにも注目したいのである。また、以上のような議論において、ハーッジ・アミンが「イスラーム・テロリズム」のプロトタイプとして重要な役割を担っており、故アラファートPLO議長とも血縁関係でつながっているという、ハーッジ・アミンとアラファートとの歴史的継承を強

6) Jeffrey Herf, “foreword” in Matthias Küntzel, *Jihad and Jew-Hatred: Islamism, Nazism and the Roots of 9/11*, New York: Telos Press, 2007, pp.x-xi.

7) Matthias Küntzel, *Djihad und Judenhaß: über den neuen antijüdischen Krieg*, Freiburg, Ça Ira, 2002.

調する常套的な説明の仕方が動員される。

「ヤーセル・アラファートのフル・ネームはラフマーン・アブドゥルラウフ・アラファート・アル・クドゥワー・アル・フサイニーであり、このことは彼がエルサレムのムフティーと遠い親戚であることを示しているし、彼は1929年生まれである。彼は幼少時代をエルサレムで過ごし、ムフティーこそが最大の英雄だった。7歳のときにすでにムフティーが扇動した反乱に参加して、投石を行なった」⁸⁾。

ナチスと同盟関係を築いたハーッジ・アミンとPLOの指導者アラファートとの親戚関係をことさらに強調して、アラファートの政治指導者としての国際的な評価を貶めるという手法は、PLOと敵対するシオニストあるいはイスラエル政府がかつてずっと行なってきたやり方であって、その意味ではここでとりわけ強調するほどの目新しさを見出すことができるわけではない。しかし、現代のイスラーム主義運動の興隆の中で、アラファートがエジプトのカイロ大学の学生時代に、1928年に結成された老舗の政治組織のムスリム同胞団のメンバーであったという事実が「政治的スキャンダル」であるかのように取り上げられ（メンバーであったかどうかは定かではないがシンパではあったとされる）、さらにその同胞団から「イスラーム・テロリズム」を（少なくとも日本を含む欧米諸国の観点から）代表するハマース（イスラーム抵抗運動）が1987年末にパレスチナのヨルダン川西岸・ガザにおいて結成されたということが、連綿と続く反ユダヤ主義的な傾向の中で位置づけるという最近の研究において重要な政治的な意味をもつということになる。事実、クンツェルもその著書の中でイスラーム主義運動が結果的に9・11事件につながるかのような議論の仕方をしているのである⁹⁾。

8) Kuntzel, *ibid.*, p.113.

クンツェルの英訳版と同様、ドイツ語からの英語への翻訳の出版で、英訳がかなり意図的に扇動的になっているものとして、クラウス＝マイケル・マルマンおよびマーティン・クッパーズ『ナチのパレスチナーパレスチナにおけるユダヤ人絶滅計画』¹⁰⁾がある。ドイツ語原版は『新月とカギ十字―第三帝国、アラブ、パレスチナ』¹¹⁾である。この英独版のタイトルの相違がそれぞれの出版社の意図が奈辺にあるかを如実に語るものとなっている。もちろん、本書もいわゆる「トンデモ本」とは一線を画した研究書ではあるものの、ナチス・ドイツの中東政策の意図がどこにあるのかという観点から英訳はかなりミスリーディングなタイトルの付け方であると言わざるを得ない。すなわち、結果的にアル・アラメインの戦いで敗北するナチス・ドイツの北アフリカ作戦をどのように位置づけるかという、その意図と帰結の評価の問題につながるからである。著者たちの関心は次のような研究史の整理の仕方に表れている。すなわち、「今日に至るまで1933年から1945年までの期間におけるドイツ・アラブ関係の展開、両者の思想的近似性の分析、ドイツ人とアラブ人によって共有されていた共同計画に関する議論などを追及した、包括的かつ科学的研究はなされていない。一般的には、現存の研究は1939年の戦争勃発で終わるか、せいぜい1941年3～4月のイラクにおける親枢軸の（アーリー・ガイラーニーの）クーデターで終わっており、1941～1942年という決定的な段階、すなわちドイツ軍が中東地域を占領しようとする切迫した期間を捨象してしまっているのである。さらに付け加えると、多くの著者たちはアラブ・ナショナリストと国家社会主義者（ナチス）との関係を軽視することによってほとんどが無批

9) クンツェルの著書の章立ては以下のとおりである。第一章 ムスリム同胞団とパレスチナ、第二章 エジプトのイスラーム主義―ナーセルから現在まで、第三章 ハマースのジハード、第四章 9・11事件とイスラエル。

10) Klaus-Michael Mallmann and Martin Cuppers, translated from German by Krista Smith, *Nazi Palestine: The Plans for the Extermination of the Jews in Palestine*, New York: Enigma Books, 2010.

11) Klaus-Michael Mallmann und Martin Cuppers, *Halbmond und Hakenkreuz: Das "Dritte Reich", die Araber und Palästina*, Darmstadt: Primus Verlag, 2006.

判の傾向をもつことになり、イスラーム世界における反ユダヤ主義のプロパガンダと行動を文化的相違に基づく『ヨーロッパ中心主義』的な見方だと警告を発するだけで簡単に片づけてしまっているのである」¹²⁾と述べて、前述のクンツェルの研究を、そのような傾向ばかりの研究の中では例外だとして高く評価することになるのである。

マルマンおよびクッパーズの両者がその著作の中で「パレスチナのユダヤ人の存在自体が治安警察の突撃部隊や北アフリカ軍団所属のSD（秘密諜報部）の活動ゆえに直接的危機にさらされているという事実は最近になるまで学術研究者によって完全に見落とされていた」¹³⁾として、高く評価しているドイツ語から英語に翻訳された研究書についてもう一冊言及すると、それは『エルサレムのムフティーとナチス—ベルリン時代』¹⁴⁾である。本書のドイツ語原版は『エルサレムのムフティーと国家社会主義者たち—アミン・アル・フサイニーの政治的伝記』¹⁵⁾であり、類書に比較すれば英語版のタイトルが取り立てて扇動的ともいえないものである。1930年代後半から第二次世界大戦期にかけてのハーッジ・アミンとナチスの関係を中心にまとめた博士論文を基に大幅に加筆した著作であり、クンツェルによる序文が付されている。

同様に、デイヴィッド・ダリンおよびジョン・F・ロスマン『悪のアイコン—ヒトラーのムフティーと急進的イスラームの台頭』¹⁶⁾という文献も基本的には9・11事件後のイスラーム・テロリズムの台頭の文脈において位置づけるといふ、これまで言及してきた同じ関心に基づく研究だとみなすことができる。同書の結論「ムフティーの遺産」において、いささかナイー

12) Mallmann, Plan, op.cit., p.viii.

13) Idem, pp.viii-ix.

14) Klaus Gensicke, translated from German by Alexander Fraser Gunn, *The Mufti of Jerusalem and the Nazis: The Berlin Years*, London & Portland, OR: Vallentine Mitchell, 2011.

15) Klaus Gensicke, *Der Mufti von Jerusalem und die Nationalsozialisten: Eine politische Biographie Amin el-Husseinis*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft (WBG), 2007.

16) David G. Dalin and John F. Rothmann, *Icon of Evil: Hitler's Mufti and the Rise of Radical Islam*, New York: Random House, 2008.なお、本書はCD-EOM版も刊行されている。

ブな物言いで、次のように記すのである。少々長くなるが引用する。

「今日の急進的イスラーム・テロリズムのルーツは多くの点でムフティーに帰することができる。ハーッジ・アミーン・アル・フサイニーはPLO, ハマース, ヒズブッラー, イスラーム・ジハード, アル・カーイダ, あるいはその他の急進的なイスラーム・グループの指導者たちに影響を与えてきたし, また与え続けており, イスラエル, アメリカ合衆国, そしてその同盟国および友好国への暴力やテロなどの行為を続けている。パレスチナ解放運動のテロリズム, ファナティシズム, そして手段を選ばないあこぎさはムフティーの変わらない遺産と影響を反映している。ハーッジ・アミーン・アル・フサイニーは死後30年以上が経過しても, 現在よく知られているように, かつて急進的イスラームの反ユダヤ主義および政治的テロリズムの父であり, 今日でも悪のアイコンとして認識されるに値する人物なのである。フサイニーによるイスラエル, イギリス, そしてアメリカ合衆国の破壊を呼び掛ける悪名高いファトワー（イスラーム法に基づく裁定）はシャイフ・ウマル・アブドゥルラフマーン, オサーマ・ビン・ラーディン, あるいはその他のテロリストたちの宗教的裁定が, ハーッジ・アミーンに従っているように, 急進的イスラームと西洋の間の文明の衝突, あるいはヒトラーのユダヤ人に対する戦争を, 彼の死後においても実行するムフティーとその追従者たちによる現在も続く戦争において, ジェノサイドの新たな理由になったのである。ムフティーやその追従者たちが1930年代から1940年代にかけて推進し奉じてきた急進的イスラームは, 今日ではイスラーム世界の多くで支配的になってきており, 20世紀後半から21世紀初頭にかけてのグローバルな反ユダヤ主義やテロリズムを, そのイデオロギースの源泉として鼓舞し続けている。／急進的イスラームからの挑戦は現代の大きな問題である。アドルフ・ヒトラーやハーッジ・アミーンが当時決定的に打ち負かされたように, 新たな悪のアイコンも我々の時代においても無条件に撲滅されな

なければならないのである¹⁷⁾。

本書は学術書の体裁をとってはいるものの、歴史を歪曲して単純化しており、まさに善悪あるいは白黒をはっきりとつけた政治的プロパガンダであるとみなすことができる。イスラエルのヘブライ語高級紙『ハ・アレツ』にしばしば寄稿しているリベラルな歴史家として知られるトム・セゲヴは『ニューヨーク・タイムズ』紙の書評において、本書は学術的価値がほとんどないとして一刀両断に切り捨てている。すなわち、本書は『イスラエルに利する』としばしば信じられている、一般受けするアラブ・バッシングのジャンルに属しているから注目に値するのであって、本書がイスラエルに利することなどはない。イスラエルの敵がナチス、あるいはナチスの継承者であると提言することは、パレスチナ人とのどのような公正な妥協をも妨げることになり、イスラエルにとっては有害なのである¹⁸⁾。

さらに、タイトルがより直接的に内容を示している文献としてチャック・モース『イスラーム・テロリズムのナチ・コネクション—アドルフ・ヒトラーとハーッジ・アミン・アル・フサイニー¹⁹⁾』がある。著者自身がボストンを拠点とする、移民問題に関して保守的論調のジャーナリストであり、ラジオ・トークショーのホストであったりもする。したがって、同書も研究書というよりも政治的にかなり偏向したジャーナリスティックな記述に満ちた種類の出版物ではあるが、その論調はアメリカ社会でそれなりに受け入れられている事実だけは指摘しておきたい²⁰⁾。

もう一冊だけ例として挙げるとすれば、ジェフリー・ハーフ『アラブ世

17) Idem. pp.142-143.

18) Tom Segev, “Courting Hitler”, *The New York Times*, September 26, 2009. (http://www.nytimes.com/2008/09/28/books/review/Segev-t.htm?_r=1)

19) Chuck Morse, *The Nazi Connection to Islamic Terrorism: Adolf Hitler and Haj Amin al-Husseini*, New York: i-Universe Inc., 2003.

20) 本論では触れることはできなかったが、もともとセルビア語で刊行され英訳されて、比較的入手しやすい文献として以下がある。Jennie Lebel, *The Mufti of Jerusalem: Haj-Amin el-Husseini and National-Socialism*, Belgrade: Cigoya Stampa, 2007.

界におけるナチ・プロパガンダ』²¹⁾ がある。先ほども触れたハーフは邦訳²²⁾もあるドイツ研究者であるが、本書では中東・北アフリカのアラブ人とムスリムを対象としたナチス・ドイツのプロパガンダ活動を、エジプト・カイロのアメリカ大使館に残された受信記録の資料に基づいて詳細に記録・解釈している。もちろん、ハーフも「戦時期ベルリンに発生したナチ・イデオロギー、急進的アラブ・ナショナリズム、そしてファンダメンタリスト・イスラームの混合物が（現代の）中東にたしかに残存している」²³⁾という立場からの歴史記述ではあるが、本書において行なわれたナチスの中東における情宣活動の作業は学術的にはそれなりに意味があると評価できる。

ハーフの研究によれば、ナチスは、1939年秋から1945年3月まで、中東・北アフリカに向けてアラビア語の短波ラジオの番組を昼夜休みなく放送した。ヒトラーは1941年5月23日、中東政策に関して命令第30号をドイツ軍の指揮官に下し、「中東におけるアラブ解放運動はイギリスに対する我々の自然な同盟者である」と言明した。その際、アラブ世界の反英勢力を強化しようと言論でいたヒトラーは、その政治的な努力をイラクに集中した。すなわち、バグダードではその数ヶ月前、親枢軸の立場をとるアーリー・ガイラーニーによるクーデターが勃発していたからである。命令第30号は、軍事使節団の派遣、空軍による支援、親枢軸のアラブ軍への武器の供与を命じた。またヒトラーは、中東におけるプロパガンダの責任を、ドイツ国防軍総司令部と協力していた外務省に委ねた。

プロパガンダ・キャンペーンの中核となる考え方は「枢軸国側の勝利は、イギリスのくびきからの中東諸国の解放をもたらし、かくして中東諸国の

21) Jeffrey Herf, *Nazi Propaganda for the Arab World*, New Haven & London: Yale University Press, 2009.

22) ジェフリー・ハーフ著、中村幹雄・姫岡とし子・谷口健治訳『保守革命とモダニズム—ワイマール・第三帝国のテクノロジー・文化・政治』岩波書店、1991年。

23) Herf, op.cit., p.x.

自決権が実現する。自由なる意志を愛する者は誰でも、それ故、反イギリス戦線に参加する」というものであった。事実、ドイツ外務省は、1939年9月以降、短波ラジオでアラビア語によるプロパガンダを放送していた。命令第30号は、こうした活動を強化し、中東での軍事的勝利といったヒトラーの野望と結びつけようとするものであった。

中東のムスリム一般に対して、ナチのプロパガンダの入り込む余地があると思われたのが、西欧の帝国主義やソヴィエト共産主義に対するナチの非難とを結びつけながら、コーランを意図的に選択して朗読することやイスラームの反ユダヤ教的な傾向に焦点を合わせることであった。ドイツの外交官たちはしばしば、ファシスト・イタリアの北アフリカにおける帝国主義的な野望を傷つけないために、アラブ・ナショナリズムや急進的なイスラームにアピールするのを制限したことがあった。しかし、中東の多くや北アフリカでも、特に1942年の枢軸国側の敗退の後には、世俗的な面と宗教的な面との区別は意味をなさなくなった。ナチスは、アメリカやイギリス、そして「ユダヤ」帝国主義を攻撃するために世俗的な言語をテキストと放送で使ったのと同様に、そのテキストと放送の中で、イスラームの内部においてユダヤ人憎悪を古来の伝統として描くことによってアピールした。ナチス・ドイツはそれ自身、理解の仕方によっては、アラブ人の反帝国主義の盟友でもあり、かつイスラームの精神的な同胞でもあるように演じた。戦前および戦時中において、ナチス・ドイツはシオニズムに対する断固たる敵であることも強調したが、こうした姿勢は、ナチズムやファシズムの活動的な同調者のサークルをはるかに越えて広範なサークルにおいて反響を得たのであった²⁴⁾。

24) Idem.pp.2-5.

Ⅲ. アラブ世界あるいはパレスチナにおけるハーッジ・アミン評価

前節までで最近の欧米におけるハーッジ・アミンの研究動向について検討してきた。それでは政治指導者としてのハーッジ・アミンが現在、アラブ世界でどのように認識されているのか。それを知るためにまず、アラブ世界全域で圧倒的な影響力を有しているアラビア語衛星放送局「アル・ジャジーラ」のホームページ上で公開されているハーッジ・アミンに関する記事「ハーッジ・アミン・アル・フサイニー革命のさまざまな端緒」²⁵⁾を少々長い引用になるが見てみたい。この記事に示された内容がアラブ世界の人々が共通して抱くハーッジ・アミン像であると思われる。

アミン・アル・フサイニーは1895年にエルサレムで生まれ、そこで初等教育を受けた後、高等教育を受けるためにアズハル〔カイロにあるイスラーム学の最高学府〕に移った。そしてまだ若輩に過ぎなかったが、ハッジ〔メッカ巡礼〕の義務を終えて、その生涯にわたってハーッジの称号を保持することになった。彼がカイロで勉強し、その時に民族運動指導について知識を得たのは政治への早熟な関心をもつという影響があった。その後、イスタンブールの士官学校に所属し、下士官の階級で卒業した。／オスマン軍に所属したが、しかし、すぐ後にアラブ革命と共に行動することを選んで、第一次世界大戦中は独立アラブ国家設立を目的としたシャリーフ・フサイン・イブン・アリーの軍隊に加わった。

「エルサレムへの帰還」

バルフォア宣言発表後、ハーッジ・アミン・アル・フサイニーはエルサレムに戻る決断をして、パレスチナにおけるユダヤ人とイギリスの存在に反対する闘争を始めた。1918年にはパレスチナ現代史上初めての

25) “al-Hājj Amīn al-Husaynī: bidāyāt al-thawra” (<http://www.aljazeera.net/NR/exeres/BAD29DFE-B903-4A19-B721-483BA90AA97E.htm>)

政治組織である「アラブ・クラブ」^{アル・ナーディー・アル・アラビー}を設立した。同クラブは1918年と1919年の2年間、エルサレムにおいて何回もデモを組織した。その時期、エルサレムにおいて第一回パレスチナ・アラブ会議を開催した。

それらのデモが原因で1920年に逮捕されることになったが、彼はヨルダン南部のカラクからダマスカスへと逃亡することができた。イギリス政府は彼に対して欠席のまま15年の禁固刑を言い渡した。しかし、エルサレムにおいては軍政に代わってハーバート・サミュエル〔イギリスのユダヤ系政治家。1870～1963年、パレスチナ高等弁務官在職1920～25年〕を長とする民政が開始されてから、同じ年に彼への再審が行なわれて、彼は〔許されて〕再びエルサレムに戻って来た。

「エルサレムのムフティー」

カーミル・アル・フサイニー前ムフティーが逝去した後、彼はエルサレムのムフティーに選ばれた。そしてパレスチナのイスラムの利益を守るためにイスラーム最高評議会が設立された。評議会は1931年にアル・アクサー・モスクで大きな会議を開催したが、その会議は第一回イスラーム会議と呼ばれて、アラブおよびイスラームのさまざまな国々から代表団が出席した。

ハーッジ・アミーン・アル・フサイニーは〔会議において〕ファトワを発表し、ユダヤ人に土地を売却した者、あるいはこのような行為を容易にする仲介者はイスラームの宗教に反するものとみなすことができ、そのような者をイスラームの墓地に埋葬することは許されないとしたのである。ハーッジ・アミーンはユダヤ人の手に渡る危険性のある土地を購入してそれをイスラームのワクフ〔所有権が放棄された寄進財産〕として設定する活動を行なった。

「秘密の手段」

フサイニーは、パレスチナ人民は近代的方法では軍事的闘争を展開することが出来ず、パレスチナ問題の解決は政治的努力によって達成すべきだと考えていた。同時に、秘密の手段を通じて軍事的細胞の形成に従

事し、その細胞は後に聖ジハード軍となる、アブドル・カーディル・アル・フサイニー〔1907～48年。ハーッジ・アミーンの甥で1948年4月にカステルの戦いで殉教したパレスチナ民族運動の英雄〕が結成した初期の中核とみなされた。

「アラブ高等組織〔史実に従えば、「アラブ高等委員会」〕」

1935年にイZZッ・ディーン・アル・カッサームが殉教した後、フサイニーは同年に結成され、パレスチナの政治諸潮流の参加したアラブ高等組織の議長に選ばれた。同組織はさまざまなアラブ諸国からパレスチナ防衛のためにやって来た義勇兵の参加を容易にすることを通して1936年革命において顕著な役割を果たした。

「ハラム・シャリーフ〔聖域〕への逃亡」

ハーッジ・アル・フサイニーは1937年6月に提案された、アラブ人とユダヤ人の間でパレスチナを分割するという計画を拒絶し、激しく抵抗したために、イギリス当局は彼を逮捕する挙に出た。しかし、彼はエルサレムのハラム・シャリーフ〔エルサレム旧市街のアル・アクサー・モスクと岩のドームがあるイスラームの聖域〕に逃げ込んだ。イギリスはイスラーム世界の怒りの感情を刺激してはならないとハラムへの突撃を躊躇したので、ハーッジ・アミーン・アル・フサイニーはハラムの内部から占領に反対する役割を果たした。

「レバノンへの亡命」

パレスチナ北部地域長官アンドリュース暗殺の後、イギリスの高等弁務官は、パレスチナにおけるイギリス軍兵士が晒されているテロに責任があるとみなして、アミーン・アル・フサイニーを大ムフティー職から解任することを決定した。イギリス当局は彼を逮捕しようと画策した。しかし彼はヤーファァーに、そして帆船でレバノンに逃れた。フランス当局は彼を逮捕したが、イギリスには引き渡さず、彼はそのままレバノンで政治活動を続けた。

「レバノンからの逃亡」

彼は英仏両国の接近後、再びレバノンから逃亡せざるを得ず、数ヶ所のアラブおよび西洋の首都の間を行き来して、初めてイラクに至った。義勇兵たちも彼に加わった。イラクでは彼はラシード・アーリー・アル・カイラーニー〔Rashīd ‘Ālī al-Kaylānī (キーラーニー-Kilānī, ガイラーニー-Gaylānī, ギーラーニー-Gilānīとも表記), 1892～1965年。王政期に3度首相を歴任したイラクの軍人で政治家〕の革命を支援した。そして革命失敗後、イラクを離れざるを得なかった。さらにトルコに渡り、そこからブルガリヤ、そしてドイツに行ったのである。結局、ドイツには4年間滞在した。

「エジプトにて」

ヨーロッパ諸国の何ヶ国かは、彼が戦争犯罪人でナチスを支援したので絞首刑に処すべきだということで裁判を要求した。そのため、彼はエジプトに逃亡せざるを得ず、そこで再びアラブ高等組織の指導に当たり、聖ジハード軍を強化する仕事に携わった。彼はジハード戦士たちへの補給・調整・支援の重要任務を担った。そこではパレスチナ人青年組織を育成し、若者に武器訓練を行なうためのボーイスカウト的あるいはレーンジャー的な諸組織がその青年組織に融合された。

1948年の大ナクバ〔破局＝イスラエル建国〕後は自宅監禁を余儀なくされ、監視が強化された。そのような状態は1952年にエジプトで〔ナーセルらの自由将校団の〕革命が勃発するまで続いた。彼は革命指導部と協力してシナイ半島からパレスチナ内部のフィダーイーーン〔パレスチナ解放戦士〕に武器を秘密裏に送った。この状態は1959年にシリア、そしてレバノンへの移住が決定されるまで続いた。レバノンでは政治活動を再開し、月刊誌『パレスチナ』を刊行し、1975年に死去するまでレバノンに滞在した。そして殉教者墓地に埋葬された（ただし、〔 〕内は引用者が追加した説明）。

本記事は「アル・ジャジーラ・ネット」アラビア語版（2004年10月3日）

の「インフォメーション」というコラムに掲載されたものである。興味深いのは、この記事は2001年の9・11事件の発生からおおよそ3年後に、「2001年特別ファイル」の「アラブ主要人物」としてハーッジ・アミンに関する情報として載せられていることである。2004年は同時に、ハーッジ・アミン没後30周年ということでもあるが、この記事に対するフェイス・ブックでのアラビア語の書き込みがなされており、次のような評価を見るにつけ、欧米における評価との温度差に驚かされる。すなわち、「おそらくハーッジ・アミン・アル・フサイニーは20世紀前半におけるパレスチナのもっとも重要な人物であった。早くからパレスチナの政治的活動を組織し、当時パレスチナを侵攻しつつあったイギリス占領とシオニストの拡大に対して抵抗する情報・軍事面での動員に参加したからであった」。

先に見たアル・ジャジーラの記事にしても、第二次世界大戦中のドイツにおけるハーッジ・アミンの活動に関わる記述はほとんどないに等しい。また、パレスチナ人がこの点についてどのようにハーッジ・アミンを評価しているのかに関しては、アラビア語版『パレスチナ百科事典』全四巻における「ムハンマド・アミン・アル・フサイニー（1895～1974年）」²⁶⁾の項目における記述をみればわかる。すなわち、「ハーッジ・ムハンマド・アミンはヨーロッパに4年以上滞在し、ベルリンにアラブ運動のための事務所を、そしてローマに第二の事務所を設立して、広くはアラブの大義のために、狭くはパレスチナの大義のために、政治、外交、情宣に関して同じように尽力に努めた」²⁷⁾といったように、アラビア語原文でいえば、わずか4行の記述にすぎない。少なくとも、以下に述べるフィリップ・マタルの著作が出版されるまでは、ハーッジ・アミンの政治的活動の評価の上でナチスに関わる都合の悪い記述は行なわないというやり方がアラビア語によるパレスチナ研究では主流になったということができよう。やは

26) 'Abd al-Hādī Hāshim, ed., *Mawsū'a Filastīniya (Palestinian Encyclopedia)*, Damascus: Hay'a al-Mawsū'a al-Filastīniya, 1984, pp.138-142.

27) Idem., p.141.

りハーッジ・アミーンとナチスとの関係に関する言及は1980年代前半まではなかばタブーといってもいいのかもしれない。

もちろん、悪意をもってハーッジ・アミーンを中傷する欧米社会と、むしろ擁護あるいは弁明しようとするアラブ・イスラーム社会という対比において、特定の人物の評価が相反するということ自体はさほどもめずらしいことではない。しかし、ことユダヤ人問題、とりわけシオニズム評価が介在すると事態は突然、政治的イシューとして過熱してしまうことを念頭に置いておく必要がある。だからといって、当然のことながら、パレスチナ人だからハーッジ・アミーンを盲目的に信奉するというわけではもちろんない。研究という観点から見た場合、フィリップ・マタルの小著ながら要を得た著作がおそらく史料批判の観点からもっともバランスの取れたハーッジ・アミーンの評伝といえるであろう。マタルは1944年にエルサレムで生まれたパレスチナ人で、コロンビア大学で学位を取得したアメリカ育ちの歴史家である。その序において、次のように述べているのは示唆的である。

しかし、彼〔ハーッジ・アミーン〕の生涯の記述はほとんど不十分である。フサイニーの政治的経歴の均衡のとれた考察の欠如が、彼の名前が常に鼓舞する熱情という観点からは驚くべきことではないのである。／ハーッジ・アミーンとしても知られるムフティーの伝記は、このパレスチナ人指導者その人よりもむしろその筆者その人のことをより多く我々に語っていることがしばしばである。モシェ・パールマン、ジョゼフ・シェヒトマン（修正主義シオニストである）、そしてエイヤーフ・エラートといった、ハーッジ・アミーンを中傷し、その運動の信用を落とそうと試みたユダヤ人ナショナリストの諸著作、ズヘイル・アル・マールデニーのような、ハーッジ・アミーンとその大義を賞賛するようなアラブ・ナショナリストの諸著作、そしてアラブおよびイスラームの地をイギリスの抑圧から解放しようと努めたムスリム指導者としてハーッ

ジ・アミーンを描くドイツの国家社会主義者たちの諸著作などがある。これらの記述は党派的に偏り、論争を引き起こすものであるため、歴史的ハーッジ・アミーンと彼が率いた運動とがほとんど識別できないものになってしまっている²⁸⁾。

マタルが引用文の中でハーッジ・アミーン評価が、「むしろその筆者その人のことをより多く我々に語っている」と述べているのは示唆的であるが、他方において反対側から党派的に偏った代表格であるパールマン、シェヒトマン、そしてエラートのシオニストの諸著作については本論では踏み込まないとして、アラブ側の代表的なハーッジ・アミーンの伝記であるマールディーニーの著作については少しだけ触れておく必要があろう。マールディーニーの著作は『ハーッジ・アミーンとの千日間』²⁹⁾と題するものである。この中で、ハーッジ・アミーンがインタビューなどで語ったことを直接引用しつつ、その生涯を辿っているのであるが、同書ではドイツ時代についてまったく言及がないのである。ところが、『ハーッジ・アミーンとの千日間』の増補版ともいっていい『パレスチナとハーッジ・アミーン・アル・フサイニー』³⁰⁾においては、旧版の第13章「ムフティーとアーリー・ガイラーニーとの間の相違の問題」と第14章「ムフティー、ドイツを離れる」の間に「ドイツで私が知り合った人々」³¹⁾と題する、章番号のない特別の章を新たに書き足している。とはいうものの、そこで記されているのは章のタイトルに示されているがごとく、ナチス・ドイツに亡命してきているイスラーム世界のムスリム指導者やインド人指導者とのことだけなのである。換言すれば、まったくハーッジ・アミーンとナチスとの関係には

28) Philip Mattar, *The Mufti of Jerusalem: Al-Hajj Amin al-Husayni and the Palestinian National Movement*, New York: Columbia University Press, 1988, p.xi.

29) Zuhayr al-Mārdīnī, *Alf yawm ma' al-Hājj Amīn*, n.p., 1980.

30) Zuhayr al-Mārdīnī, *Filastīn wa al-Hājj Amīn al-Husaynī*, Beirut: Dar Iqrā', 1986.

31) "Hā'ulā' Ta'arraft 'alayhum fī Almāniyā" in al-Mārdīnī, *Filastīn*, pp.233-244.

触れられていないのである。

もちろん、パレスチナ人によるアラビア語の評伝においてドイツ時代のハーッジ・アミンが言及されていない著作ばかりではない。ヨルダンのムスリム同胞団に属すると思われ、イスラーム主義者としての立場を明確にしているアウニー・ジャッドゥーウ・アル・ウバイディーによるアラビア語の評伝として『ハーッジ・アミン・アル・フサイニーの生涯の断章』³²⁾がある。ウバイディーは第29章「なぜ枢軸なのか?」、第30章「ドーチェ（統帥）・ムッソリーニとの会見」、第31章「ドイツ・ベルリンへ」、第32章「ヒトラーとの会見」、第33章「(枢軸との) 公式の盟約」という五章を設けて、ムフティーと枢軸との関係を述べている。もちろん、それぞれの章は数ページに過ぎず短いために、詳述とはいいがたいものの、次のような表現に筆者の考え方がよく示されている。すなわち、「フサイニーは、重要なアラブの諸問題のうち、パレスチナ問題などの支援を取り付けるために枢軸側に行ったのであって、決して枢軸国の側に立って共に闘うために行ったのではなかった。それは彼自身の大義のため、植民地主義の委任統治およびそのシオニスト同盟者のくびきからパレスチナを解放するためだったのである。この二人の指導者〔ヒトラーとムッソリーニ〕に会った要因は民族主義的〔ワタニー〕な要因だけであって、それに基づいてパレスチナの大義にとって有用かつ前向きな解決案あるいは方法を模索することを決定したのであって、〔ヨルダン川の〕河から〔地中海の〕海までの土地〔パレスチナ〕を収奪者〔イギリスとシオニスト〕から取り戻すというウンマ〔ムスリム共同体〕の希求とその安全と合致したからなのである」³³⁾。

ウバイディーの説明の仕方はナチスとの戦術的同盟関係を強調しており、いささか弁明じみたニュアンスも感じられなくはないが、枢軸側との接触を正面から取り上げているという意味では、先に触れたマタルがその

32) 'Awnī Jaddū' al- 'Ubaydī, *Sahfāt min Hayāt al-Hājj Amīn al-Husaynī*, Zarqā': Maktabat al-Manār, 1985.

33) Idem. pp.138-139.

著作の第8章「ナチ時代」においてハーッジ・アミーンの活動の評価に関して踏み込んで「ムフティーが現代史上もっとも野蛮な体制と協力したという明らかな、そして抗すことのできない事実を無視した」と批判的に述べているほどではないと思われる。

それはさておき、マタルは党派的に偏った立場からムフティーに関する記述については次のように厳しく批判するのである。

ムフティーの生涯において第二次世界大戦期間中ほど論争を巻き起こし、歪曲の対象になった時期はほかにない。シオニストは彼がナチスと協力したという罪があり戦争犯罪人であることを証明しようと熱心になってしまうので、ナチスとの関係を誇張してしまっている。他方、ムフティーとそのほかのアラブ人たちは枢軸国における彼の発言や行動を正当化しようとするあまりに、ムフティーが現代史上もっとも野蛮な体制と協力したという明らかな、そして抗すことのできない事実を無視したのである³⁴⁾。

そしてマタルは続けて、党派的に偏った立場をとる筆者たちは、ナチスがアラブ大反乱を鼓舞し、資金的援助を提供したなどといった根拠のない主張をしているとし、また1941年のイラクのアーリー・ガイラーニーのクーデターにしても、アラブ・ナショナリストによる枢軸側との協力を、共通の敵の打倒にあるとも言ったりしているとする。マタルは「黄金の四人組」と呼ばれ1930年代から40年代初頭までのイラク政界を牛耳ったイラク人将校の一人であるサハーフ・ディーン・アッ・サッバグによる次の言葉を引用して批判する。すなわち、「私はイギリス人の民主主義も、ドイツ人のナチズムも、ロシア人のボルシェヴィズムも信じてはいない。私はアラブ・ムスリムだからだ」、と³⁵⁾。

34) Mattar, *ibid.* p.99.

マタルはナチス時代のハーッジ・アミーンに関する党派的に偏った歴史記述に関して次のようにまとめる。

シオニストの非難のために、アラブ政治家たちあるいは著作家たちが戦時中のムフティーの活動を無視したり、軽視したり、正当化したりしてしまっている。彼らの議論は本質的には、彼はイギリスによってドイツに追放されたのであり、イギリスは1937年以来、彼を逮捕して投獄しようとしたのであり、他方で、彼は帝国主義に対してパレスチナ、アラブ、そしてムスリム諸国を解放するために活動してきたというものである。彼は政治的な機会主義に基づいてドイツと協力したのであり、まったく同じ理由でウィンストン・チャーチルやフランクリン・D・ルーズベルトは専制者スターリンと協力した。結局、チャーチル自身が語ったように、彼自身がヒトラーと対抗するために悪魔そのものと同盟を組んだのである。

シオニストの非難も、アラブの正当化も、ムフティーがナチスとどの程度まで協力したのかをわれわれが理解することには寄与しない。それはほとんど、彼のドイツ時代についての研究の見かけ上の目的がアラブ・イスラエル・プロパガンダ戦争の延長戦にあるからである。公開されたドイツ語資料に基づく周到かつ非党派的な研究こそ、ドイツにおけるムフティーの役割を解明することにつながるのである³⁶⁾。

IV. おわりに

ハーッジ・アミーンの評価においては常に「党派性」がつきまとっているということが研究状況を一瞥しただけで明らかになろう。歴史がすべて

35) Mattar, *ibid.* pp.99-100.

36) Mattar, *ibid.* p.107.

現代の評価に関わる以上、そのこと自体から抜け出すことは不可能に近い。とりわけ、いまだ出口が見えずに続いているパレスチナ・イスラエル紛争の渦中にあるがゆえに、その評価が困難であることはいうまでもない。しかし、今後のハーッジ・アミーン研究の方向性をどのように考えればいいのか、若干の私見を述べて本論を閉じることにしたい。

最近の研究動向から明らかなように、ハーッジ・アミーンの名義との同盟関係を政治的に非難することよりも、まず何よりも、委任統治期パレスチナの中においてイギリスおよびシオニストとの関係においてハーッジ・アミーンが「悪魔化」される以前と以後をきちんと分けて、それぞれの政治的文脈で彼の政治行動をきちんと押さえるということである。その作業の前提として、エルサレム出身のフサイニー家が果たしてきた歴史的役割を改めてパレスチナ近現代史の中で再検討する必要がある。実際、そのような作業はその端緒に就いたばかりである。具体的には、イスラエルのハイファ大学からイギリスのエクセター大学に移ったイラン・パペが、フサイニー家の近現代における歴史に関して、まずヘブライ語版で出版し、さらに英語版でも刊行したことが注目される³⁷⁾。パペは刊行の理由の一つを次のように説明している。すなわち、「本書〔英語版〕は『西洋』の読者に向けられている。本書はもともとヘブライ語で執筆され、この国の歴史の覇権的なイスラエル・ユダヤの見方に意義を唱えることを試みた。現代イスラエルにおいては、1882年以前のパレスチナは依然として、人の住んでいなかった土地と一般にはみなされており、パレスチナが発展するのはシオニズムおよびそれに伴う西洋的近代が上陸してからにすぎないとされてきた。さらに、1918年後のパレスチナ人政治エリートは学術的にも一般書でも、原始的部族民、ファナティックなムスリム、憎悪に満ちたシェイフ

37) Ilan Pappé, *The Rise and Fall of a Palestinian Dynasty: The Husaynis, 1700-1948*, London: Saqi Books, 2010.

たちとして描かれてきた。ヘブライ語版ではフサイニー家を理想化するのではなく、人間化して描くことを試みたが、それは同家がパレスチナで最高の地位にあり、相対的によく知られているからであった（ハーッジ・アミーンは第二次世界大戦中ナチスと同盟したという非難の故に、また最近ではファイサル・アル・フサイニー〔1940-2001年、エルサレムを拠点としたパレスチナ人政治指導者。ハーッジ・アミーンの甥アブドル・カーディル・アル・フサイニーの息子〕の「反イスラエルの」政治行動の故に）」と述べている。そして彼は「西洋、とりわけアメリカ合衆国では、同じような見方が優勢であり、だからこそパレスチナおよびパレスチナ人に対する偏見に満ちた敵対的イメージを修復するために同じような試みが必要なのである。このことは2001年9月11日事件及び第二次インティファダ以降においてはとりわけ急務だと私には思われるのである」³⁸⁾と提起しているのである。もちろん、1948年のパレスチナ人の「ナクバ」論争をめぐる「自己嫌悪のユダヤ人Self-hating Jew」とシオニストに揶揄され、政治的にも忌避されているパペの発言が欧米の言論界においてどこまで影響力をもつかは別問題として、彼の指摘はやはり検討するに値する³⁹⁾。

イスラエル人研究者、パレスチナ人研究者、あるいはそれ以外の研究者を問わず、実証的な史料批判に基づく学術研究が徐々にではあるが、蓄積されていることについては「はじめに」において少しだけ触れた。とりわけ、注目に値するのが、ハーッジ・アミーン自身がインタビューなどに基づいてアラビア語で著した著作『パレスチナ問題の真実』⁴⁰⁾や彼が機会あるごとに発表した論考の一部が英訳されて資料集として提供されていることである⁴¹⁾。もちろん、アラブ世界でもハーッジ・アミーンのエッセー⁴²⁾

38) Idem., 9.

39) パペがハイファ大学を辞めざるを得なかった経緯については次の文献を参照されたい。Ilan Pappé, *Out of the Frame: The Struggle for Academic Freedom in Israel*, London: Pluto Press, 2010.

40) Al-Hājj Muhammad Amīn al-Husaynī, *Haqā'iq 'an Qadiyat Filastīn*, Cairo: Dār al-Kitāb al-'Arabī, 1957.

が刊行されたりもしているが、管見のかぎりでは彼についての研究あるいは出版はそれほど活発であるとはいえない。ハーッジ・アミン自身が何を意図していたのかを、改めて史料批判に基づいて明らかにすることがパレスチナ現代史の文脈では必要であろう。

しかしながら、9・11事件以降顕著になっている、ハーッジ・アミンとナチスを文脈抜きで直結させて再度「悪魔化」していくような単純な歴史的裁断に基づいて、新たな「白黒史観」に傾く研究動向の中であって、改めてハーッジ・アミンの政治的役割の功罪をパレスチナの状況を国際関係の中に位置づけつつ、是々非々の観点から検討していく必要性は、パペの指摘するように急務であろう。またマタルが提起しているように、何よりもまず、ナチス関係資料を、同時代のナチスの中東政策とパレスチナ内部の動きと連動させて、改めて批判的に検討する作業が必要であろう。

41) Zvi Elpeleg, ed., Rachel Kessel, tr., *Through the Eyes of the Mufti: The Essays of Haj Amin*, London & Portland, OR; Vallentine Mitchell, 2009.

42) 'Abd al-Karīm al-'Umar, ed. *Mudhakkirāt al-Hājj Muhammad Amīn al-Husaynī*, Damascus: al-Ahālī, 1999. なお、編者のアブドルカリーム・アル・ウマルは、ダマスカスにある「パレスチナ高等アラブ組織執行事務局事務局長」という肩書が記されている。

A Palestinian Leader in Germany during the Second World War: A Recent Trend in Studies on the Relationship between al-Hajj Amin al-Husayni and the Nazis

Akira USUKI

《Abstract》

In this article, I discuss a recent trend in studies on a Palestinian political leader, al-Hajj Amin al-Husayni (1895-1974) with special attention to the relationship between Hajj Amin and the Nazis (National Socialists) during the Second World War. Hajj Amin's enemies have accused him of collaborating with the Nazis. Appointed the Grand Mufti of Jerusalem in the early 1920s, he escaped arrest by the British authorities from Palestine in 1937 for his role in the Palestinian Arab revolt in 1936. He went into exile in Nazi Germany and stayed there until the end of the war, after the failure of Rashid Ali Kaylani's coup in Iraq in 1941. Recently a lot of new studies have been published to emphasize his political role under the Nazi regime. These studies claim that Hajj Amin shared the Nazis' hatred of the Jews. Some researchers also assert that Nazi ideology persists among radical Arab nationalists and Islamic fundamentalists in the Middle East and that the collaboration between the Nazis and Hajj Amin during the war introduced the political and ideological ideas of Nazism into an Arab and Islamic context, especially after September 11, 2001. Against this background, this article tries to re-touch the picture of Hajj Amin's role from Arab and Palestinian perspectives.